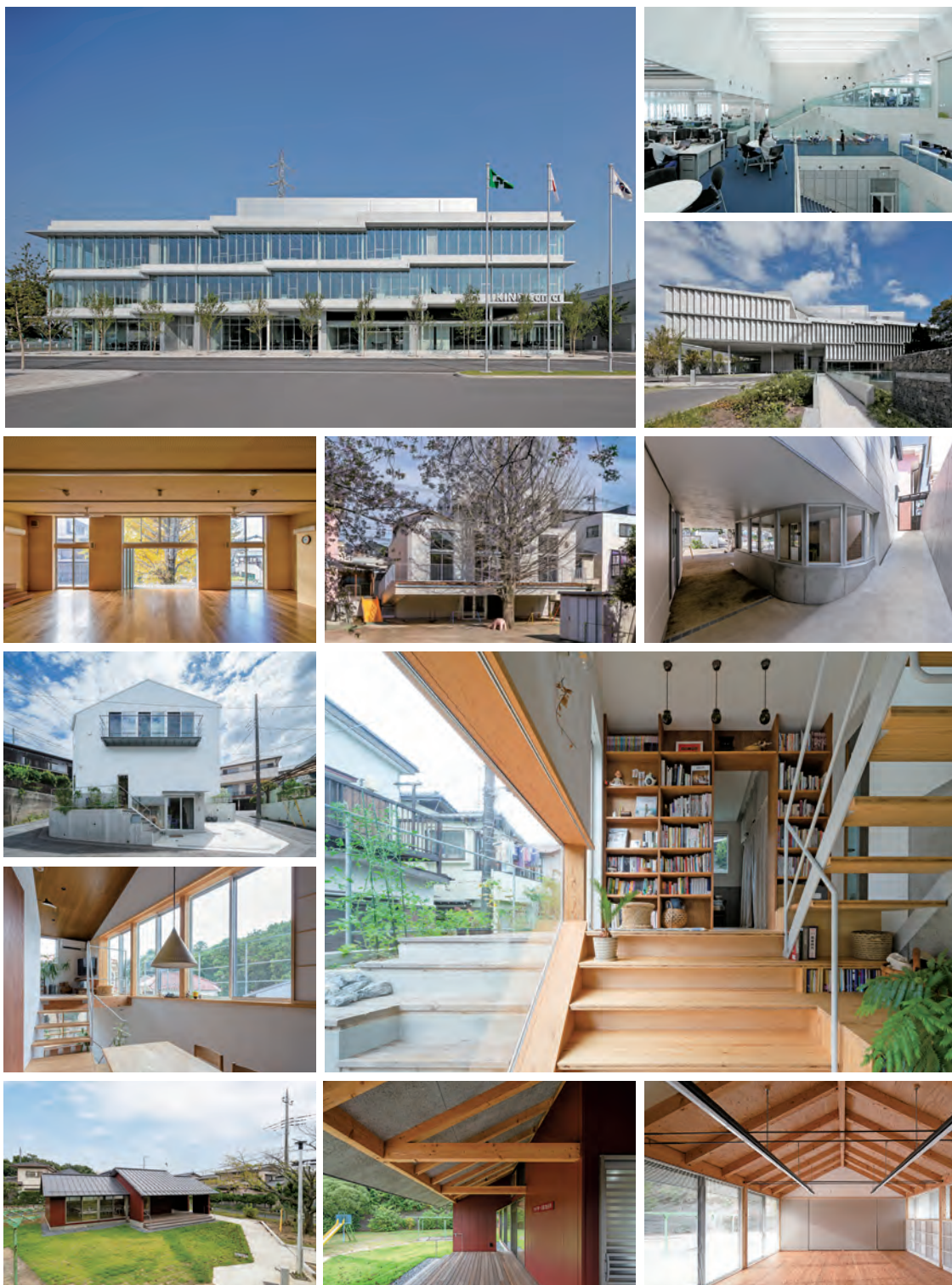


# 第31回(令和6年度) 千葉県建築文化賞 表彰作品集



主催：  千葉県

共催：  一般社団法人 千葉県建築士会

# 千葉県建築文化賞について



千葉県知事 熊谷 俊人

令和6年度の千葉県建築文化賞に多くの皆様から御応募をいただき、誠にありがとうございました。

千葉県建築文化賞は、建築文化や居住環境に対する県民の意識の高揚と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的に平成6年度に創設されました。

第31回となる今年度は、56点もの御応募をいただきました。

その結果、千葉県建築文化賞検討会議による検討内容を踏まえ、最優秀賞2点、優秀賞2点及び入賞5点の合計9点を選定したところです。

受賞作品は、新築の建物から既存ストックを有効活用したもので多岐にわたっており、人々の暮らしや柔軟な環境が提供されたもの、周辺環境との調和を生むもの、歴史的な景観を継承するものなど、いずれも千葉の魅力を高め、地域の活性化に貢献する素晴らしい作品ばかりです。これらの建築物が、地域社会の中で親しまれ、本県の建築文化の向上と、より良いまちづくりの推進に寄与していくことを心から期待しています。

今後とも県では、社会環境の変化等に対応し、県民の命と暮らしを守るとともに、恵まれた自然環境や優れた都市機能を持つ千葉で、全ての県民が生きる価値、働く価値を感じられる「千葉の未来」を創造していくため、全力で取り組んでまいりますので、引き続き御理解と御協力をお願いいたします。

結びに、受賞者並びに御応募いただいた皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げまして、あいさついたします。

令和7年3月

## 目 次

千葉県建築文化賞について	1	Bring up みどり子ども発達センター	7
第31回千葉県建築文化賞選考経過と総評	2	ROVEN OTAKIMACHI	8
KIND Center	3	都市の通庭	8
さうさうのいえ	4	部分断熱の家	9
やきりっこホール	5	選考の基準	9
大木戸第一公園集会所	6	第31回千葉県建築文化賞検討会議	9
児童養護施設房総双葉学園 小規模グループホーム	7	千葉県建築文化賞の実績(応募総数・受賞作品数)一覧	10
		受賞作品の位置	10

# 第31回千葉県建築文化賞選考経過と総評

## 応募56点から9点を表彰



千葉県建築文化賞検討会議委員長 岡部 明子

### (選考経過)

第31回千葉県建築文化賞は令和6年5月の検討会議で募集要項を定め、7月上旬から9月下旬まで応募・推薦を受け付け、総数56点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)

例年に比べて応募数の少なめの回ではあったが、魅力的な作品が多かった。応募していただいた皆さまの熱意に深く感謝したい。

一次選考はすべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真等をもとに投票を行い、一般建築物7点、住宅5点を選んだ。次いで11月の3日間かけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。二次選考は12月開催の検討会議で、現地調査の報告を踏まえて再度投票を行い、討議を重ねながら優秀な建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある応募作品については、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、最優秀賞2点、優秀賞2点、入賞5点を表彰候補作品として決定した。

募集部門	選考経過	応募総数	現地調査 (一次選考)	受賞作品選定(二次選考)		
				最優秀賞	優秀賞	入賞
一般建築物		32	7	1	2	3
住宅		24	5	1	0	2
合計		56	12	2	2	5

### (総評)

今年度は比較的小規模な福祉施設の応募が複数あり、地域共生社会の動きに応答する物的環境の変化を感じさせられた。また、さまざまな制約の厳しい条件下、創意工夫に秀でた小作品と、恵まれた条件で質の高い建築物を実現した作品を前に、どのような建築行為が、建築への県民の意識を高め、建築物で構成されるよりよい環境の提供に寄与するのかをめぐって議論が白熱した。

最優秀賞の「KIND Center」は、AGC千葉工場群の入口に建つ執務・会議機能を集約した建物で、偶発的な交流を促し、人びとの創発を引き出すことをねらって、スキップフロアで内部全体を連続させ、一体的な空間を実現させている。千葉県湾岸の工場地帯と市街地は、広幅員の道路と緑地帯によって二重に分断されているが、そこにカラフルな室内が垣間見られる本建物が顔を出しており、変貌しつつある工場地帯と市街地の新たな関係を予見させるところが本賞にふさわしいと判断された。

これとは次元の異なる観点から評価されたのが、優秀賞の「やきりっこホール」である。1960年開園以来、部分建替えや増改築を重ね地域に親しまれてきた幼稚園の遊戯室新設である。限られた敷地において、地域のランドマークとなってきたイチヨウの大木をなんとしても守り、それとまるで抱擁するようなデザインである。本園に緑のある設計者と経営者の共同作業で、園児はもとより地域の人たちを複数世代にわたり建築とともに育むプロセスが秀逸である。

優秀賞の「大木戸第一公園集会所」は、自治会館の建て替えに際し都市公園内に場所を移し集会所として建てたものであり、高齢化の進む東京圏の郊外で地域活動の拠点の新たなかたちを示したといえる。自治会の人たちとともに実現させたことで、自治会の自主活動でみごとに運営されており、公園の利用の幅も広がっている。

入賞の「児童養護施設房総双葉学園小規模グループホーム」は、家族と生活することが難しくなった子どもたちが少人数で共同生活をする家であり、普通の住宅地にある。住宅のようでありながら住宅でない絶妙な距離感のデザインである。「Bring up みどり子ども発達センター」は、発達障害の子どもが通う施設で、発達障害児への細やかな配慮がデザインに結実している。「ROVEN OTAKIMACHI」は街道沿いの町家を宿泊できるレストランに改修するにあたり、設計者自身がいっしょに仕事をしている大工と現場に滞在し、地元の職人たちとともに施工する体制をつくっている。古民家改修に適したスキームである。

一般建築物の部

今回の応募作品から、コロナ禍を経て部分的にリモートワークを取り入れる働き方が定着し、住宅に求めるものに変化が伺えた。

最優秀賞の「さうさうのいえ」は、豊かな自然に近いことが魅力だが、かなりの斜面住宅地にあった。区画の三方を固める擁壁が老朽化し何らかの手当てが不可欠だった。平場をつくって家を建てる定石自体を考え直し、階段状の基礎が擁壁を兼ねるオルタナティブを実現させている。斜面地でこうした更新が連担していけば、住環境が格段に向上する可能性を示したところが大いに評価された。擁壁にかわって土間スペースができ、道との連続性をつくることにも成功している。

入賞の「都市の通庭」は、戸建て住宅には過酷な周辺環境の準住居地域にあって、アプローチのポケットパークを外に開き、内部の内路地と連続させている。「部分断熱の家」は、古民家を使い続けるときに求められる相入れない要素を取り入れてラディカルに改修し、古民家活用の幅を広げた事例といえる。

住宅の部

## 最優秀賞

一般建築物の部

～働き手を中心に据えたオフィスデザイン～

# KIND Center

建築主：AGC株式会社 千葉工場  
設計：株式会社渡邊健介建築設計事務所  
施工：大成建設株式会社  
所在地：市原市五井海岸10



東側外観を見る。段状に構成された内部の形式が建物ファサードにも現れる。

本作品は、AGC株式会社の千葉工場内に新設された鉄骨造4階建ての事務所ビルであり、働き手の快適性や交流を促進し、それを通じてwell-beingを実現する設計が随所に見られる。

建物の設計では、450mmごとの段差を連続的に配置し、フロア間で自然に視線が交差する立体的な空間構成が採用されている。この工夫により、偶発的なコミュニケーションが促進される仕組みである。

光環境では、AGCの素材であるETFE膜を使用した光天井が採用されており、昼間は自然光を柔らかく拡散し、夜間は均一な人工光を提供することで、空間に心地よい明るさと温かみをもたらしている。

音響面では、空間が連続していたり容積が大きい場合、制御が難しくなるが、大ホールはラインアレイスピーカーを採用することでクリアな音響を実現し、ゲストエリアにはマ

スキングシステムの導入でプライバシーを確保するなど、音響技術を活用して用途に応じた環境が提供されている。

特に注目すべきは、休憩スペースである。照度を抑えた柔らかな照明とデザイン性の高いインテリアが、落ち着いた雰囲気を演出している。心のゆとりは機能性だけを満たす空間では生まれないと常々思うのだが、丁寧な設計により、利用者が自分のペースで過ごせる柔軟な環境が提供されていることに驚いた。働き手を大切に思う企業の姿勢が伝わってくる。

書き綴りたいことはまだあるが、総括すれば、人の行動に合わせた空間操作、光や音の細やかな環境調整、意匠性と機能性が融合した設計によって、働き手を中心に据えたオフィス建築の今あるべき姿を示している様に思う。

(加藤 未佳)



3階より立体的に対面する広場を吹抜け越しに見る



西陽に対してアルミエキスパンドメタルによるルーバーを設置。隣接するゲストを迎える緑地と一体的に整備。

(撮影全て:鳥村鋼一)

建築主：S氏  
 設計：一級建築士事務所ikmo  
 施工：株式会社中野工務店  
 所在地：市川市

～地形を再編集 街に開く層の家～

## さうさうのいえ



擁壁形状に沿った階段状のライブラリー

「街角に陽だまりができた」周辺に住む人はそんな印象を抱いたのではないだろうか。この敷地は周辺に緑地や水辺が残る閑静な場所で、住宅地と緑地の間の斜面に位置している。3方を囲む老朽化した擁壁と地下駐車場を更新する必要があったため、設計者は道と地形と住宅の関係を再編集して「街へ開いた風景」と「住まい手の暮らしの提案」を巧みに計画した。新設された擁壁は傾斜に沿って階段状に高くなり周囲への圧迫感を低減した。地下駐車場だった場所は地下室となり、斜面下を切り取られた屋外交流スペースとなり見通し抜群である。上家は土留めとなるRC造壁を基礎とし、2階建の在来木造フレームを載せ施工性にも配慮した。内部空間は地下レベルから地盤に沿わせて半階ずつずれた6フロア構成となり、ひとつ上がるごとに住まい手の生活の様子が体感できる。外部との関係を作る窓の位置、家具や収納の高さ関係や配置などが緻密に計算されて無駄がない。4～5フロアのダイニングとリビングは段差を使いそれぞれが西側バルコニーにつながる。眺望の先

は緑地帯と空だ。障子で西陽の調整をしながら日々の情景の変化を楽しめる。欲を言えば外から上階の内部空間が見てとれないのが物足りなく感じる。

建築主は望んでこの土地を購入したとのことだったが、擁壁の暗いイメージから変貌した暮らしは想像以上だったのではないか。敷地周辺には空き家もあり、地域の住まいの更新を考える際の指針にもなる。この家の新しい擁壁と手摺は緑に覆われ、行き交う人の憩いのスペースとして存在感が増していくだろう。

(藤本 香)



西側外観



緑を望む開口でつながる  
 ダイニングとリビング  
 (撮影全て:西川公朗)

## 優秀賞

一般建築物の部

～イチョウと園児の活動をつなぐおおらかな遊戯室～

# やきりっこホール

建築主：学校法人藤樫学園  
設計：松本巨志建築設計事務所  
合同会社円酒構造設計  
株式会社設備計画  
施工：日南鉄構株式会社  
所在地：松戸市下矢切140



遊戯室

幼稚園の園庭に遊戯室を増築する計画である。敷地は前面道路から1.6m、背後の隣地から3m程度低く、建替等を経てきた既存園舎のレベル設定も特殊であった。その特異な「地形」との丁寧な対話が建築のかたちに結実している。レベル差の調停や遊戯室の面積確保等のいわゆる制約や条件がポジティブに計画に反映されたことを感じさせる素直な佇まいだ。さらにイチョウの根と土壌への配慮という生態学的感性、土圧壁と一体化した基礎で錨の役割を担保する土木的感性、園児の安全や活動の豊かさへの配慮の身体的感性がフラットに現れている点が巧みである。

一階のピロティは天高約2mとやや低いが、イチョウの枝下高さで調和し、園児たちにとっては秘密基地のようなスケール感である。遊戯室の内装は木調としつつ、今後壁面に増える貼り紙や制作物となじみやすいよう配慮されており、人間活動に付随するモノと景観の問題も考えられている。

錨の役目を担うための厚さ450のマッドスラブや柱状改良が、この建物規模としては過剰に見えるのは当然として、建物の窓が南北方向に全く無い方向性の強さは少々気になった。倉庫や遊戯室からスロープの上や下に抜けるささやかな視線が、園児の小さな活動を目撃し、場の使い方の幅が広がるかもしれない。

また地域活動への遊戯室の貸出しも運用面で特筆すべき点だ。安全面等の幼稚園の特性上、今後どのくらい開かれていくだろうか。遊戯室の単なる貸出しにおさまらない活動が生まれるなど、より一層の地域との活発なつながりを期待したくなる建築である。（海法 圭）



外観

(撮影:井上登写真事務所)



園庭と遊戯室をつなぐスロープ

(撮影:井上登写真事務所)

建築主：大木戸台自治会  
 設計：ジーテック一級建築士事務所  
 施工：株式会社伴工務店  
 所在地：千葉市緑区大木戸町178-68

～地域住民との対話から生まれた集会所～

## 大木戸第一公園集会所



住宅街のまちなみと調和する都市公園内の集会所

(撮影:東涌宏和)

本作品は、老朽化した旧自治会館に代わる施設として、地域住民の交流と活動を支える場として計画された木造平屋建築であり、高齢化が進む地域の日常利用や災害時の一次避難所としての役割も併せ持つ重要な集会所である。

設計には大学の研究室が参画し、学生たちは設計プロセスを間近に体感する貴重な機会を得た。地域住民との対話を重ねながら現実的かつ持続可能な計画を進め、住民の意見や要望を丁寧に反映させることで、建物が単なる公共施設ではなく、地域住民の思いが込められた「自分たちの場」として受け入れられる存在となっている。こうした協働の積み重ねが、完成後の施設が地域に親しまれ、長く利用される基盤となるのだろう。

建物のデザインは、二つの切妻屋根を平面的にずらして配置することで街並みに調和しつつ象徴性を持たせており、屋根の交差部分に設けられた高窓付きの吹き抜け空間が自然光を室内に取り込むことで、明るく開放的な雰囲気を演出している。近

年は特に建設資材の高騰が著しく、限られた予算の中での設計は苦慮する点も多かったようだが、在来軸組工法を基盤とし、一般的な流通材を用いながらも8.1mの無柱空間を実現したことは合理的で好例といえよう。

建物のエントランスに設けられた広い屋根付きの外部空間は、地域イベントやマーケット、音楽会など多様な活動を受け入れる柔軟性を備えており、公園利用者の憩いの場としても機能している。多目的で柔軟に利用できるこの施設は、地域コミュニティを支える重要な拠点として長く親しまれるだろう。

(加藤 未佳)



水平材と斜材で組んだ片持ち梁により、小断面材で間口8100mmの屋根を支持する  
 (撮影:東涌宏和)



構造材をあらわした活動的な雰囲気の集会所

## 入賞

一般建築物の部

～地域で見守る子どもの居場所～

# 児童養護施設房総双葉学園小規模グループホーム

千葉市の住宅街に建てられた小規模グループホームは、地域の中で子供たちと職員が一般住宅で生活する児童養護の形態である。

本園が近傍にあり地域での受け入れ環境があることも、地域に溶け込みやすい環境であったのであろう。

子ども達が地域に見守られながら安全に暮らすために、施設内の様子が街へそれとなく染み出す隠れ家スペースは、子ども達の隠れ家であり、街との接点ともなっている。

内部空間は、居場所としての多重回遊動線と家事の最短直線動線を上手に組合わせて、職員が執務をしながら子ども達の様子を見守ることができる。



1.3mの低天井部:子どもたちの隠れ家であり、街との接点となる  
(撮影全て:浅川敏)

また、子ども達と職員の心と体の状況に応じて、自分の居場所を選択できるリビング、階段、セカンドリビング、隠れ家スペースと多様な空間を用意して、6名の子ども達と入れ替わりで同居する職員にかかる精神的なストレスを緩和させることを試みている。

基本部材は規格材を使用しつつ、部分的に鉄骨を用いたハイブリット構造でローコスト化を実現すると共に、自然光や自然通風によるパッシブ建築となっており、省エネ効果をあげている。

地域の子ども達も遊びに来るといふ当施設は、これからの児童福祉施設のあり方を提示している。  
(久富 清敏)



外観正面:中央部のガラススリットが街に室内の気配を伝える

建築主: 社会福祉法人創英舎

設計: 株式会社OOOarchitecture一級建築士事務所

施工: 株式会社シー・エス・ホーム

所在地: 千葉市緑区平山町1921-4

## 入賞

一般建築物の部

～五感を触発し、回遊する空間で子どもたちの感性を育む～

# Bring up みどり子ども発達センター



鳥瞰 (撮影:OOOarchitecture)

この施設は、発達障害をもつ子ども達が遊びの中で感性を育むことができる居場所をつくること、地域との繋がりや保護者支援も行える場所として計画された。

建物は中庭を中心に円状に療育室等、個室やアルコーブが中庭から離れた配置としている。地形に沿って緩やかにレベル差のある床や屋根、段差を利用した室を移動することで視線や空間スケールの違いを体感できる。中庭は安心して遊べる屋外で光や風の自然を感じ、デッキは時には食事の場、室を介さない通路としての利用も可能で、隣接する常設アートギャラリーや正面玄関からもアプローチ可能な位置付けだ。

福祉が地域に開くことの重要性が求められる反面、過度な刺激を避けたい子ども達の過ごす場のあり方を解決していく手がかりがあると感じた。建物形状からイメージしたキャラクターデザインや感覚的に受け入れられるサインデザインも好感が持てる。現状、正面玄関が敷地内の駐車場側にあること、道路側から地域に開くホールに直接アクセスはできるものの、中庭までの抜けはやや分断した印象だった。地域に根付いた施設になるには時間も必要だが、土台はできており今後の運用や活動を見守っていきたい施設である。  
(藤本 香)



中庭  
(撮影:ShotaHiyoshi)



建築主：株式会社カブトス  
設計：E4株式会社  
farm  
施工：E4株式会社  
所在地：夷隅郡大多喜町新丁17-2

入賞

一般建築物の部

～物・人・知の連関による歴史の再編～

## ROVEN OTAKIMACHI

大多喜城下の街道に面して大正から平成に建てられた母屋・蔵・住宅・倉庫をレストラン、一棟貸のホテルとして改修した建築群である。

使用されていない城下町の街道の雰囲気を残した建物を取り壊さずに、新たな収益施設としてよみがえらせている。

元々酒屋であり、街道に面して開かれた造りとなっていた土間から中庭までをレストランとして空間を拡げ、空間の利用率をあげている。

既存の階や部屋を区切るものを抜いて、建物の持つ気積を大きくし、抜いた部材や建具を別棟や外構で転用(再利用)して、環境負荷低減にも配慮している。



商屋を改修したレストランと奥へとつづく通り土間



籠ることを楽しむ蔵を改修した宿

(撮影全て:JUMPEI SUZUKI)

一棟貸のホテルは2棟あり、田園の間は過去の増改築の痕跡を所々に見せて、地元の歴史的な素材を感じさせている。複数人の居場所をつくることでセミナーハウスのような使用も可能としている。大多喜城を望むテラスデッキは城下町としての景観を思い出させる。

蔵の間は、架構を見せつつ壁面素材を生かした閉鎖的な空間で落ち着いた雰囲気とし、別棟の風呂では開放感を感じさせている。

運営や施工において、地元職人とチームを組み慣習的なディテールを習い入れることで、人と技術の連関を未来へとつなげる役割を担っている。(久富 清敏)

建築主：平林 洋  
設計：acaa  
施工：万葉建設株式会社  
所在地：習志野市谷津

入賞

住宅の部

～緑が誘う内と外が溶け合う住まい～

## 都市の通庭

ガソリンスタンドと集合住宅に挟まれた旗竿地に建つこの作品は、道路を歩いているだけではその存在に気づきにくい。しかし奥へ目を向けると緑豊かなポケットパークが広がり、木々の隙間から覗くベンチや小さな水鉢に興味を惹かれ、つい足が奥へと進んでしまう。そよ風に揺れる葉音と柔らかな光に包まれたこの小さな空間は、都市の喧騒を忘れさせ、住まいの第一印象をやさしく彩る場となっている。

ポケットパークを抜けると、「内路地」と呼ばれる空間が広がる。吹き抜けから降り注ぐ光と窓越しの緑、さらに裏庭とつながることで内路地全体に心地よい風が流れ込み、室内でありながら屋外のような開放感を生み出している。内路地の壁には隣接する個室につながる装飾窓が設けられ、そこから漏れる柔らかな光が家族の存在を感じさせ、住まい全体に温かさにつながりをもたらしている。

さらに内路地は、住人が料理教室やイベントを開くなど、プライベートとパブリックが自然に交わる場でもある。時には犬の散歩をする人がポケットパークに迷い込むこともあり、偶然の訪問がこの場所にちょっとした賑わいを添えている。ポケットパークから内路地、裏庭へと続くこの空間は住まい手のみならず、訪れる人々に穏やかで心地よい時間を提供している。(加藤 未佳)



裏庭へと続く路地のメタファーとしての屋内空間



敷地高低差を活かし通庭に設えられた歩廊と居場所  
(撮影全て:西川公朗)

# 入賞

住宅の部

～熱的境界の再定義により、民家改修の現代的課題を照射する家～

## 部分断熱の家

建築主：T氏  
設計：中川 純+戸邊 亮司+永井 拓生  
+ 冨山 正幸+深和 佑太  
施工：シグマ建設株式会社  
所在地：野田市



ダイニング(断熱空間)からリビング、和室、縁側(非断熱空間)を見通す。熱的境界面はLow-eガラス(断熱)を用いた木製建具。温熱環境の差異を内包するレイヤー空間。熱的な差異に応じて主体的に住まい方が変化する。

日本家屋の現代的な再構築への試みである。改修コストの観点から全面的断熱改修を選択せず、居住者の利用実態をみすえて熱的境界をいかに設定するかは現代的課題といえる。本計画では居住者内でも様相が異なり、一人は古民家の保存活用を希望し、一人は都市部のマンションのような空間を求めたという。そういう意味で単なる部分断熱の話にとどまらず、古材とクロスがどのように共存しうるかという様式的折衝の実践である点もユニークである。また実測調査や分析を行い、時期に応じて快適性を損なわず生活する方法を論理的に提示しているのも大きな成果といえる。

一方で審査を通じて部分断熱そのものの是非は議論となった。また格式を担保するヴォイド空間において、天井を撤去してSUSワイヤーを露出させた意匠性やグレアの強い照明計画など、伝統的建築様式への所作に疑義が生じた。

これらの議論の決着は容易ではないからこそ本質的である。僕自身の勝手な見立てであるが、季節で生活領域が変わる豊かさのより具体的な提示(改修コストとは異なる価値基準の構築)や、ほぼ半屋外のような環境となるヴォイド空間と庭との一体的な活用方法はあるか(屋外と割り切ることによる計画学的な発明)、または熱的に開かれた(閉じた)内部を保有するからこそできる近隣への開き方(近隣への緩衝帯としての非断熱領域)などにヒントがあるかもしれないと、今回の審査を通じて考えている。(海法 圭)



南の庭から縁側を見る。約100年前の大工仕事による設えを継承し、現代的な手法で日本家屋を再構築した。南面に拡幅された廊下を丁寧に解体し、基礎を新たに設けて復元した。木製建具はシングルガラスを採用。

(撮影全て:Takeshi Yamagishi)

### 選考の基準

次の事項を選考の基準とし、総合的に審査します。

- デザイン性に優れていること
- 安全で快適な建築空間を創出していること
- 防災への配慮がなされていること
- その他、独自の取組や提案がなされていること
- まちなみや周辺の景観と調和がとれていること
- 環境負荷の低減に配慮していること
- 施工上優れていること

※建築基準法等の諸法令に適合しており、かつ近隣等との紛争が生じていないこと等も含む。

### 第31回千葉県建築文化賞検討会議

【敬称略 委員は五十音順】

委員長 岡部 明子：東京大学大学院教授	委員 海法 圭：建築家
副委員長 岩村 和夫：東京都市大学名誉教授 (～令和6年11月1日)	委員 加藤 未佳：日本大学教授
	委員 久富 清敏：一般社団法人千葉県建築士会会長
	委員 藤本 香：環境デザイナー、千葉大学特任教授

第31回千葉県建築文化賞に御応募いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。  
応募総数56点の中から最優秀賞2点、優秀賞2点及び入賞5点の、合わせて9点が選定されましたが、応募作品はどれも優れた特徴をもった質の高い作品でした。  
作品に携わられた皆様に敬意を表し、今後ますますの御活躍を期待しております。

千葉県建築文化賞検討会議事務局



## 千葉県建築文化賞の実績(応募総数・受賞作品数)一覧

回数	年度	応募総数	建築文化賞			建築文化奨励賞
			部門		合計	
1~19回計 (H6~H24)		1,600	景観上優れた建築物の部	46	96	58
			ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部	26		
			環境に配慮した建築物の部	24		
20	H25	68	一般建築物の部	4	6	2
			住宅の部	2		
<b>1~20回計</b>		<b>1,668</b>			<b>102</b>	<b>60</b>

回数	年度	応募総数	部門別内訳	部門	建築文化賞			
					最優秀賞	優秀賞	入賞	合計
21~30回計 (H26~R5)		657	384 273	一般建築物の部	8	25	25	58
				住宅の部	5	16	9	30
31	R6	56	32 24	一般建築物の部	1	2	3	6
				住宅の部	1	0	2	3
<b>21~31回計</b>		<b>713</b>			<b>15</b>	<b>43</b>	<b>39</b>	<b>97</b>

※1 千葉県建築文化賞は、「景観上優れた建築物の部」及び「高齢者・障害者等に配慮した建築物の部」の2部門への表彰制度として平成6年度に創設。  
 ※2 第3回(平成8年度)に「建築文化奨励賞」を新設。  
 ※3 第5回(平成10年度)に「環境に配慮した建築物の部」部門を新設。  
 ※4 第12回(平成17年度)に「高齢者・障害者等に配慮した建築物の部」から「ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部」へと部門の名称を改称。  
 ※5 第20回(平成25年度)に「景観上優れた建築物の部」、「ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部」及び「環境に配慮した建築物の部」の3部門から「一般建築物の部」及び「住宅の部」の2部門へと部門を再編。  
 ※6 第21回(平成26年度)より「建築文化賞」及び「建築文化奨励賞」から「最優秀賞」、「優秀賞」及び「入賞」へと賞の区分を再編。

## 受賞作品の位置





千葉県建築文化賞は、多くの皆様の協力に支えられ、回を重ねてまいりました。  
その間、県下の広い地域にわたり、延べ199(奨励賞を含めると259)の建築物が受賞され、  
それぞれの地域に根付いています。  
第32回の作品募集は、令和7年夏頃行う予定です。皆様方の御応募をお待ちしております。

### お問い合わせ先

#### 千葉県県土整備部都市整備局建築指導課

〒260-8667 千葉市中央区市場町1-1 TEL.043(223)3180 FAX.043(225)0913

#### 一般社団法人 千葉県建築士会

〒260-0013 千葉市中央区中央4-8-5 TEL.043(202)2100 FAX.043(202)2101

### 後援

(公社)千葉県建築士事務所協会

(公社)日本建築家協会関東甲信越支部千葉地域会

(一社)日本建築構造技術者協会関東甲信越支部JSCA千葉

(一社)千葉県設備設計事務所協会

(一社)日本建築学会関東支部千葉支所